

市内遺跡試掘調査報告書

— 長野県諏訪市平成9年度市内遺跡試掘調査報告書 —

1998.3

諏訪市教育委員会

市内遺跡試掘調査報告書

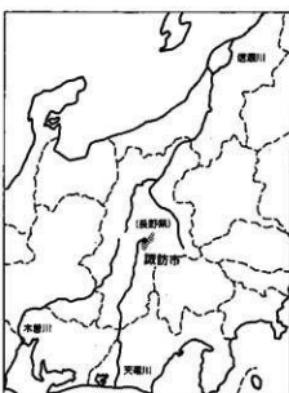
—長野県諏訪市平成9年度市内遺跡試掘調査報告書—

1998.3

諏訪市教育委員会

例　　言

1. 本書は、長野県諏訪市内遺跡の試掘確認調査報告書である。
2. 本調査は、諏訪市教育委員会が調査主体者となり、諏訪市教育委員会の編成する諏訪市遺跡調査団が調査を担当した。
3. それぞれの現場における調査期間は、遺跡ごとに記載してある。報告書作成作業は平成9年12月から平成10年3月まで、諏訪市社会教育センターにおいて行った。
4. 本文中における水系レベルは現地における地形図からの読み取りの標高である。
5. 現場における記録と整理作業の分担は次のとおりである。
遺構等実測…青木正洋・田中　純・五味裕史・小松とよみ・原　敏江・矢崎つな子・藤森敏幸
遺物水洗・注記作業…小松・原・矢崎・藤森・官坂茂子
遺物実測及び遺構遺物トレス・図面写真整理…小松・原・矢崎・藤森・青木・田中・五味
6. 本書の執筆については工事局、それ以外は調査担当者が主に行い、それぞれの遺跡の調査担当について卷末の一覧表に示した。
7. 調査の記録は、諏訪市教育委員会で保管している。
各遺跡の出土遺物の注記は以下のとおりである。
(金子城跡-KNE2、KNE3　漆垣外-URG　千鹿頭社-STKA6　清水遺跡-SSMA7
神宮寺跡-JNG　御幣平A-OBDA2)
8. 発掘調査及び報告書作成に際し、調査・整理作業参加者の他に下記の方々はじめ多くの方々に御指導・御教示を得た。記して感謝申し上げる。
上条宏志・原　環・後町正久・若松愛子・北原弘一・古屋勝哲・松沢輝重・笠原静剛・小泉修造・赤羽末男・小島　実・小島真一・小島雅則・浅川清栄・中川広泰・郷道哲章・原　明芳・平林彰・守矢昌文・河西克造・官坂　清・小池岳史・柳川英司・亀割　均・高見俊樹・(有)丸善不動産・(株)エムケー開発・大同建設株式会社・(株)金子工務店・長野県教育委員会文化財保護課



目 次

例 言	
目 次	
I 市内遺跡試掘調査について	
1 今年度の試掘調査	1
2 調査組織	1
II 金子城跡遺跡	
1 遺跡の位置と環境	3
2 過去の調査	4
3 2次調査の結果	5
4 3次調査の結果	7
5 調査のまとめ	8
III 漆垣外遺跡	
1 遺跡の概要	10
2 調査内容について	11
3 調査のまとめ	13
IV 千鹿頭社遺跡	
1 遺跡の位置と環境	14
2 過去の発掘調査	14
3 調査内容について	16
4 調査のまとめ	19
V 諏訪神社上社遺跡（隣接地）	
1 調査の概要	20
VI 清水遺跡	
1 調査の概要	22
VII 神宮寺跡遺跡	
1 調査の概要	24
VIII 御幣平A遺跡	
1 遺跡の位置と環境	26
2 調査内容について	26

平成9年度試掘・立会い調査一覧表

報告書抄録

写真図版

I 市内遺跡発掘調査について

1. 今年度の試掘調査

諏訪市内には現在240箇所を越える埋蔵文化財包蔵地が確認されている。近年の開発ラッシュに伴い、包蔵地内における個人住宅建設などの小規模な開発工事が増加しており、各包蔵地において虫食い状態の開発が続いて、遺跡保護に支障をきたすようになってきている。このような状況下、諏訪市教育委員会ではそれぞれの開発行為に対処すべく、諏訪市遺跡調査団を編成し、国庫・県費補助事業「市内遺跡発掘調査事業」として試掘あるいは確認調査を行っている。

本年度の試掘調査の件数は9件で、それぞれにおいて多大な成果を収めることができた。それらを本書において、まとめて報告するものである。

補助事業決定の経過（抄）

平成9年5月28日付け諏生学博第13号

平成9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書 市内遺跡発掘調査事業（国庫）

平成9年7月3日付け9諏生学博第14号

平成9年度文化財補助金交付申請書 市内遺跡発掘調査事業（県費）

平成9年7月3日付け府保伝第7号

平成9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知 市内遺跡発掘調査事業（国庫）

平成9年7月14日付け長野県教育委員会教育長指令9教文第2-11号

平成9年度文化財補助金交付決定通知 市内遺跡発掘調査事業（県費）

2. 調査組織

諏訪市遺跡調査団（平成9年度）

團長 吉田 守 （諏訪市教育委員会 教育長）

副團長 藤森富夫 （諏訪市教育委員会 教育次長）

官坂光昭 （諏訪市文化財専門審議会 委員）

調査担当 五味裕史・青木正洋・田中 総 （諏訪市教育委員会 学芸員）

調査団員（調査参加者）

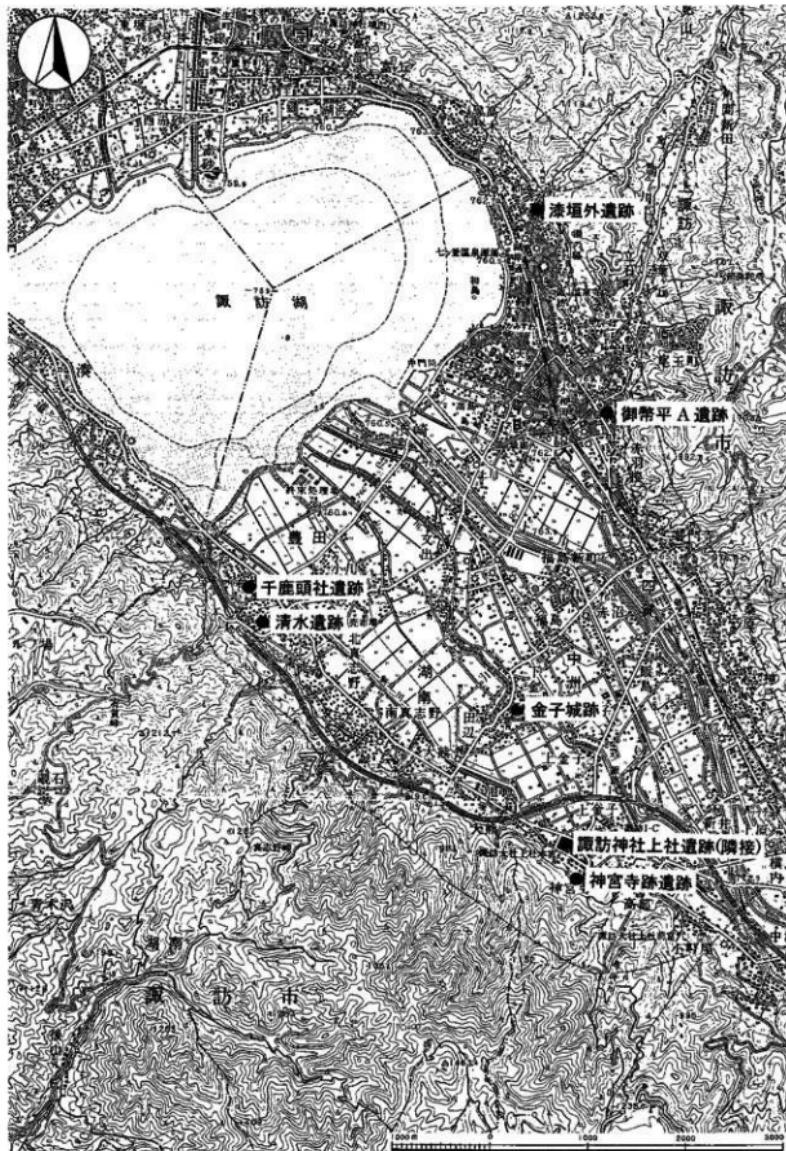
小松とよみ・関 喜子・原 敏江・矢崎つな子・宮坂茂子・藤森敏幸・中島 透・
八代宣之

（事務局）

事務局長 花岡潤吉 （諏訪市教育委員会 生涯学習センター所長）

事務主幹 有賀義人 （諏訪市教育委員会 諏訪市博物館館長）

事務局員 五味裕史・青木正洋・田中 総 （諏訪市教育委員会 諏訪市博物館）

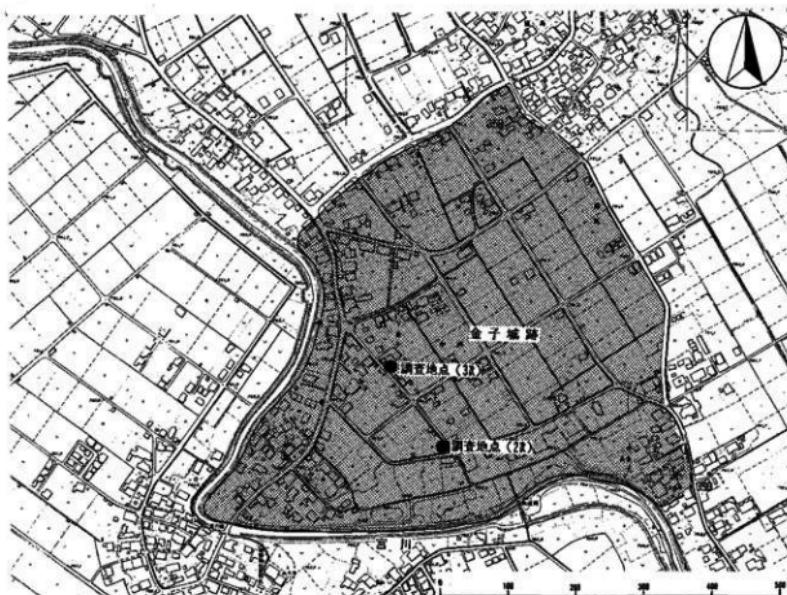


第1図 遺跡の位置 ($S=1/50000$)

かねこじょうあと
II 金子城跡遺跡（2次・3次調査）

1. 遺跡の位置と環境

金子城跡遺跡は諏訪市中洲の沖積地に広がる中世の城跡である。金子城の築城については、「諏方誌」などの記述から文亀元年（1501）に源方安芸守源頼満が大熊城の千野氏と協調して築かれたとされるが詳細については不明である。このころの建物は城といっても、周囲に堀をめぐらせた館的なものであった可能性が強く、いわゆる平城と呼ばれる金子城になったのは、諏訪藩主源訪頼忠が天正12年（1584）に茶臼山城（当時は高島城と呼称している）から移動し、築城したものである。その後頼忠は天正18年（1590）に豊臣秀吉の命による国替えで武藏国に移される。そしてかわりに諏訪には日根野氏が入ることになり、現在の高島城の築城が文禄元年（1592）に始まりその時金子城から石材等が運搬され、高島城が築城されたとの伝承があることから、金子城の破却がこの頃行われたものと推定される。金子城の使用期間は約8年間ほどと推定され、短期間の使用だったことが文献資料から読み取れる。その後政治の中心は高島城へと移り、江戸時代における高島藩の統治が始まるのである。

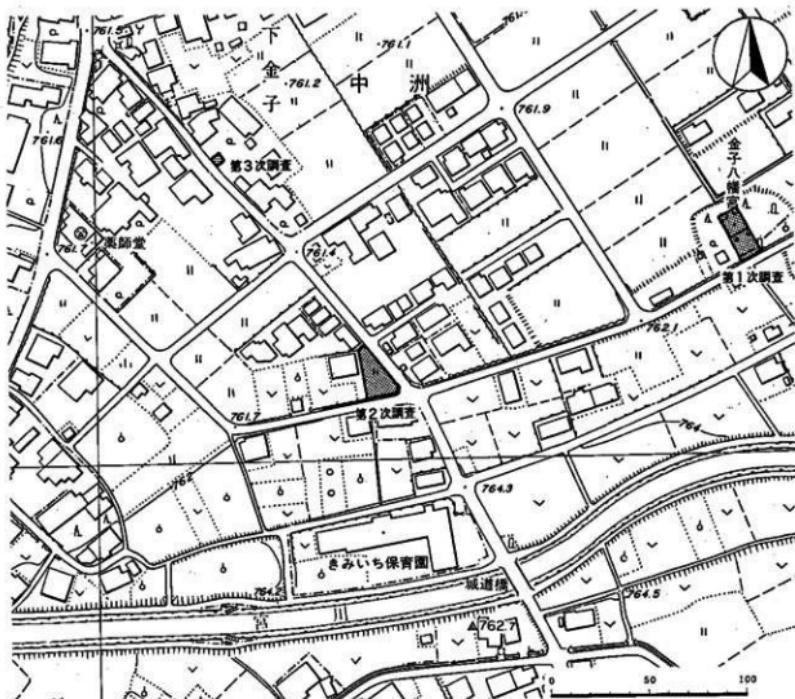


第2図 遺跡位置図 (1/5000)

金子城については、城の見取り図等の文献がほとんど残っておらず、建造物の様子を知ることはできないが、現在の地形や字名などから平面位置図については何度か復元が試みられている。特徴として、宮川が大きく蛇行する三角洲的な土地を利用し、三方を宮川の流路による自然堤防とし、残る東側には人工の堀を設け、その内部をさらに水堀や土塁などで区画して、城の防御に努めている。また、現在も遺跡範囲東側に建立されている金子八幡社は城の鎮守として勧請されたものである。

2. 過去の調査

金子城跡遺跡の範囲内における発掘調査は、平成7年の第1次調査のみである。遺跡範囲内は、前述しているように宮川の氾濫を幾度か受けたことなどから、土地改良が大正年間から進み、宮川の流路をつけるなどの大規模な工事が行われてきた。また、農地用の水利などの面からも、開発がいち早く進んだ地域でもあり、考古学的な調査は行われてこなかった。それらの工事の際に出土したとされる内耳土器の破片などが、唯一金子城の存在を示す考古学的資料として、「中洲村史」に出土遺物として紹介されているが、出土時の記録等は残っていない。



第3図 金子城跡調査区の位置

平成7年に行われた1次調査は、この金子城の鎮守として勤請された金子八幡社の本殿改築にともない実施されたものである。

この八幡社は村の南東はずれにあり、社地は広く、杉・柏の巨樹に蔽われている。村の「諸事覚帳」に「堺永四年珠八幡宮ノ大栗相談ノ上伐リ由シ候、五カカエ程コレ有リ候亥年」とあるところを見ると、昔の森はもっと広く大きかったと推定される。

1次調査では、八幡社境内に2箇所のグリッドを設定し手掘りにより精査をしたが、土地改良の影響か、表土が厚くまた硬くしまっており、埋め戻しの土と思われる膠泥じりの土層であったため、遺構等の残存する可能性はないものと判断して、調査を終了している。築城当時から勤請されているとすれば、遺構等が残っている可能性も高かったのであるが、結果的には何も発見できなしまで終了となった。

なお、日根野氏は高島城築城際に金子城を破却し、八幡社は土戸門の付近に遷したが、頼水が帰封の時、元に戻したらしいという村の記録もあるがはっきりとはしていない。

3. 2次調査の結果

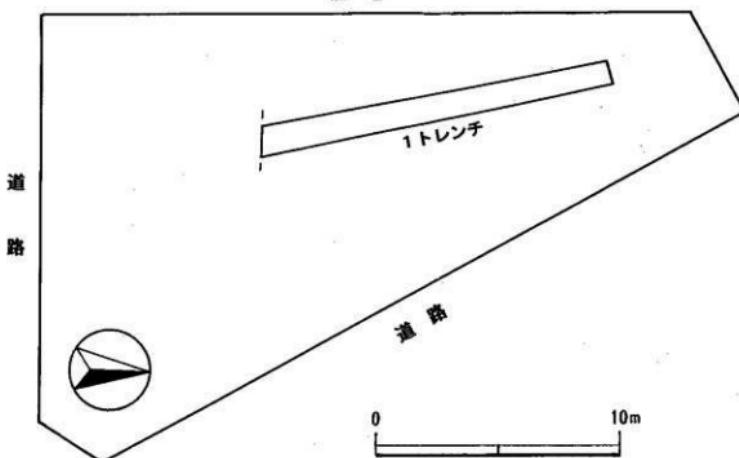
金子城跡遺跡の2次調査は、住宅建設に先立ち平成9年5月16日に行われた。場所は金子城跡の範囲内で、現在でも字名が三の丸と呼ばれている宮川わきの畠地である。4月の農地転用申請に続き、発掘届が提出されて、遺跡内の工事が判明した箇所である。古地図や絵図などの文献資料から読み取ると該地は追手門の近くにあたり、1次調査などでは確認できなかった城に関する遺構等が存在する可能性が高い場所として、注目される地域であった。(第3図)

調査は、約334m²を対象として行われたが、該地は耕作整理などにより埋め戻しの土が表土としてかなり厚く堆積していることが過去のデーターなどにより確認されていたため、重機を投入して幅1.5m長さ12mほどのトレーナによる確認調査となった(第4図)。土地改良時の埋土と考えられるローム混じりの土を1mほど除去したところで、漆黒の黒色土が検出され、この面を旧地表面と考え、面的に広がりを確認したが、かなりの水付きの泥炭層で、遺構等は検出できなかった。その後下へ調査をすすめ、水田耕作の跡と考えられる酸化鉄の薄い層が検出されたため、該地が一時水田として使用されていたことが判明した。この水田がいつごろ耕作されたものか、現段階では不明であるが近世以降のものと判断し、金子城築城当時の生活面はその下にあるものとし、さらに下方へ掘り下げを行った。

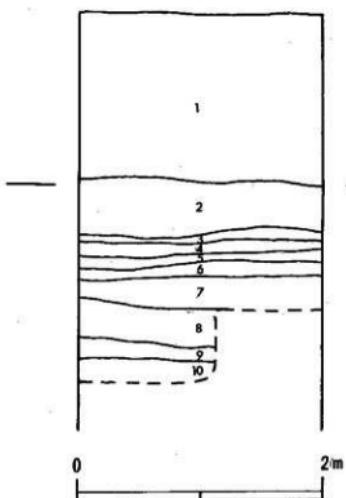
この面から下は、湧水が激しく、泥に埋もれながらの調査となつたが、土層自体には硬質面や泥炭以外の層が入ってくることはないまま、深さが2m50cmを越えたため、これ以上の調査は危険と判断し、掘下げを中止し、土層観察をしたことにとどまった。遺構として検出されたものではなく、生活的な広がりも押さえることができなかつた。また出土遺物も表土近くで近代以降の陶磁器片が僅かに確認されたほかは、4~5層付近の水付の土層に自然遺物と考えられる枝状の木片や、やや炭化された木の実や葉が確認されたのみで、中世に属するようなまた金子城を示唆するような遺物は検出されなかつた。枝状の木片についても加工痕などは見受けられず、自然に堆積したものと判断される。

結局、今回の調査では金子城の存在した中世の生活面は検出されず、出土遺物からも金子城の存在を把握することはできなかつた。城の中心地からの距離を考えると、今回の調査地はすでに建物等が存在する地域から外れているものと判断される。

住宅



第4図 金子城跡（2次調査）試掘トレンチ図



【土層注記】

- 1 表土・埋土
- 2 黒褐色土層・・・粘性あり、しまりやや不良。
上部に鉄分の沈殿が見られる。
- 3 灰褐色砂層・・きめの細かい砂質土層で
しまりも良い。
- 4 黄褐色粘土層・・きめの粗い粘土でしまり不良。
- 5 灰褐色砂層・・3層とほぼ同じ砂質土層。
4層との間で涌水あり。
- 6 灰褐色粘土層・やや白みがかった粘土層。
表面に自然遺物が付着。
- 7 黒褐色土層・・・粘性あり、しまりやや不良。
- 8 暗褐色土層・・7層よりやや白味があり、
しまりが良い。
- 9 黒墨土層・・・粘性やや強く、しまりは普通。
- 10 棕色土層・・・9層より粘性なくしまりは良好。
9～10層にかけて自然遺物出土。

第5図 試掘トレンチ土層断面図

4. 3次調査の結果

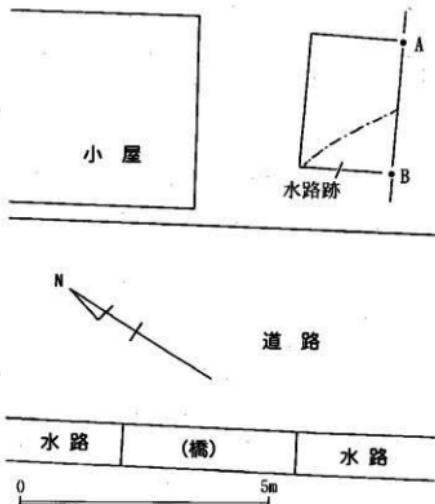
本遺跡は過去に2回、試掘調査が行われているが、直接金子城に関連する遺構や遺物は検出されておらず、いまだ現地形との関連を含めて不明な点が多い遺跡で、金子城の建造物がどのようなものであったのか早急の調査が望まれている遺跡である。

今回の調査地は、字名が堀田といい、堀があったとされる場所に該当する。これまでの調査では、遺構が検出されていない本遺跡のなかでは、文献の平面図と遺構の関係が判断しやすい場所で、調査区外の現道路についても、堀（水路）をうみて道路とした事実が確認されている点からも、遺構の存在の期待が大きい場所であった。（第3図）

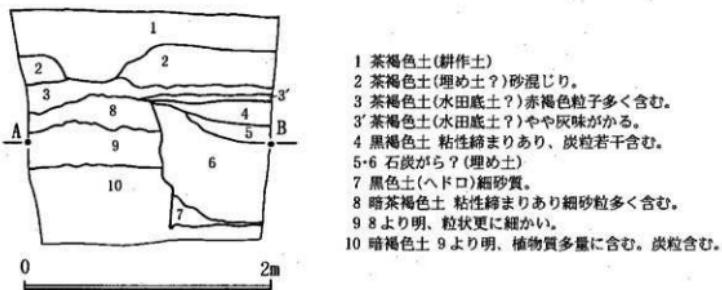
調査は、住宅地造成にともなう事前試掘調査として行われ、5月22日に実施した。調査対象面積は503m²で、住宅建設部分を中心に1箇所の試掘グリッドを設定し重機と手掘りで調査を行った。該地における試掘グリッドは宮川の氾濫を受けた様子がその土層堆積から読み取れ、小砂利混じりの砂質の氾濫によるものと堆積される土層が、何層にもなって検出されている。また低湿地ということもあり地下水位が高く、往時の生活面の検出は困難であった。これまでの調査でも、生活面の検出はされていないが、現地表下70cmでややしまった土層が確認されたため、一応この面を生活面として把握することにし、そこから下については湧水の関係もあり、調査しなかった。この面での遺構の検出はなく、この層に至るまでの間に陶磁器の破片等も出土しているが、近世以降の所産と考えられるため、直接金子城に関連するものではないと判断した。（第6図）

土層堆積状況は、本遺跡の普遍的な状況としての土地改良時の埋め土が1mほど表土として覆われており、それを畑の耕作による擾乱が入っている。またその下には水田耕作跡と判断される酸化鉄の沈殿層が約20cmの厚さで、混入しており、2次調査と同じくこの地も水田として使用された経験があることが判明した。その面を除去すると、やや締まった土層になり砂混じりの暗茶褐色土のなかにやや黒みが強く、炭粒を若干含む落ち込みが検出された。すでにかなり湧水が始まっていたため、面的な調査が不可能であったので、重機により掘り下げを行い、断面にて精査を行った。セクション観察によると、東側は2次調査でもみられた泥炭的な土層が正順に堆積しているのに対して西側（道路側）は、石炭ガラのような粒の大きい土塊を主に埋め戻したような土層で、約1mほどの深さを持つ溝状の断面を示していた。その埋め土と溝状の掘り込みの最下層には、砂質であるがヘドロ状の黒色土が残存しており、この落ち込みが、水路あるいは堀の一部であったことを示す特徴的なものとして把握されるものと思われる。（第7図）

前述したように現道路に堀があったとすると、この落ち込みは堀の東端ということも想定され、金子城跡遺跡としては初めて遺構的に確認されたこととなるのであるが、今回の調査では遺物の出土がまったくないため、その後の水路的な落ち込みの可能性も否定できない。いずれにせよ埋め戻しを行っていることは確実で、そういう事実を文献等と照らし合わせていくことで、遺構の性格等が判明するものと期待される。なお、この掘り込みは反対側の断面ではみられないことから、この遺構の主軸はほぼ東を向いているものと仮定されるが、そうすると堀が広がる方向と違うため、金子城との関連は薄いかも知れず、今後の調査で道路を挟んだ反対側等の調査が進めば金子城の外郭が見えてくるのではないかと考えられる。



第6図 金子城跡(3次調査)試掘グリッド図



第7図 試掘グリッド土壠断面図

5. 調査のまとめ

金子城跡遺跡は、市内遺跡のなかでも最大の範囲をもつ広大な遺跡である。その遺跡範囲は3万m²をこえる。しかしながらこれまでの調査で、いわゆる城跡に関する遺構、遺物の発見はなく、平城としての金子城をうかがい知ることは出来ない。すでに幾度かの河川氾濫と土地改良を受けている状況下、唯一連想されるのは、その特殊な地名であろうか。第8図に地名の一覧を掲載したが、「城」や「堀」などのことばが所々に見受けられ、これらの名前から堀に近い部分、あるいは本丸に近い部分などの区別

が出来よう。今回調査した2地区は、堀に開通するあるいは堀に開通するということであったが、城の本丸からは遠い箇所であり、城に開通する構造は検出されなかった。

金子城の築城は、天正11年から12年にかけて比較的短期間に大急ぎで実施されたと考えられているが、それには宮川の平坦地における大蛇行と土砂の堆積、周辺一帯の湿地泥濁性を利用したのであろう。城の周囲は三方を宮川の水流を堀として利用し、残りの東方は人工の水堀を設け、その内部はさらに水堀と土壘で防衛・区画し、本丸・二の丸・三の丸・侍屋敷・馬場等が設置されたものと考えられるが、詳細についてはまったく不明である。平面図については地字・地形的構造などによって当時の様子をうかがうことが出来るが、源訪の平城の最初として、どのような石垣や建築物、堀などが設けられたのか、立体的な構造物についてはほとんど知ることが出来ない。城の鎮守として勤請された金子八幡社は城跡の北東に現存するが、鬼門除けとして福島に建立された地蔵寺は元禄の頃、上源訪岡村に移建され、跡地は寺屋敷（寺庭）と呼ばれ集落の共有地となっている。

このように、金子城が実在していた中世の面影はほとんど残っておらず、また土地改良および宮川の堤防改修、河川流路の移動などにより水害が減ったことなどの理由から、急速に宅地化が進んでいる。今回の調査も住宅建設にかかるもので、地表下約1mまでは、土地改良時の埋め土で覆われている。幸いにも、城の中心地帯から外れている箇所が多く、城の本体に関する遺構等が破壊されてしまった可能性は少ないものと考えられる。そんななかで、3次調査により、堀あるいは水路状の落ち込みが確認されたことは、城の範囲を考えるうえで、たいへん興味深いものと思われる。2次調査のなかでは、特に遺構的なものは認められなかったが、埋め土の下に泥炭的な（スクモ状とはまたがう）土層の堆積を認めたことが、成果であったと考えられる。往時の生活面が把握できなかったことが残念であるが、低湿地における調査の難しさを痛感している。今後、本遺跡内の調査では、湿地土層における調査方法の確立と生活面の把握が課題となろう。泥地でぬかるんでいるうえでは、建物が存在する可能性は限りなく低いもので、中心地における土層堆積との比較も必要となろう。

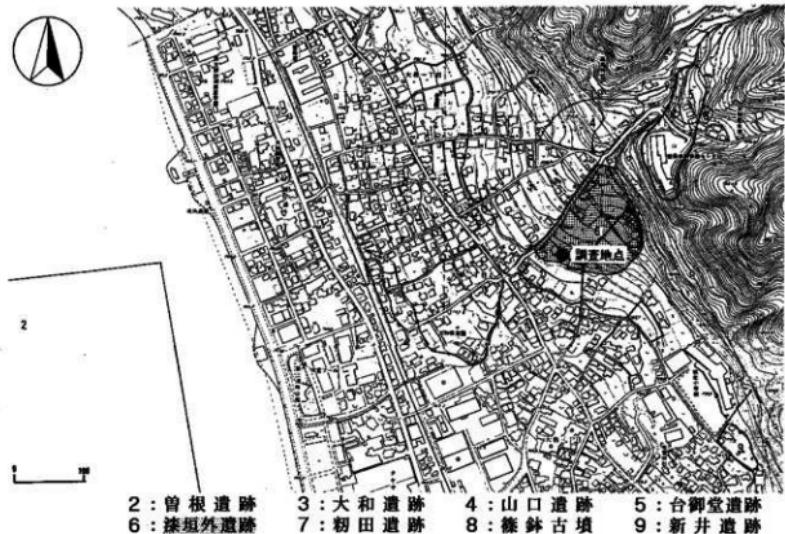


第8図 金子城跡推定復元図（『諏訪市史』上巻より）

うるしがいと
III 漆垣外遺跡

1. 遺跡の概要

漆垣外遺跡は霧ヶ峰西山麓から連なる諏訪湖東岸の大見山麓をその源とし、諏訪湖に注ぐ千本木川の左岸に同河川の氾濫等により形成された扇状地に立地する縄文時代から平安時代の遺跡である。この千本木川が注ぎこむ諏訪湖沖の湖底には縄文時代草創期の遺跡として学史上著名な曾根遺跡が立地しており、また千本木川を挟んだ右岸には縄文時代から古墳時代の遺物が大量に採集されることから大規模な集落の存在が予想される大和遺跡と山口遺跡が立地している。また、本遺跡と同じ左岸上流には縄文時代前期から中期にかけての遺物が採集されている台御堂遺跡や、実体が明らかでないが墳丘であると伝承されている篠鉢古墳が存在している。これらの周囲の遺跡の情報から、本遺跡についても縄文時代以降の集落が存在する可能性が高い遺跡として把握されてきた。しかしながら、宅地として早くから土地利用がなされていた場所でもあり、これまでに発掘調査は行われておらず、遺跡の内容については表面採集の遺物のみによる把握でほとんど不明な状況であったため、遺跡の実体を把握するため不動産取引等に間連して確認調査を行うこととなった。



第9図 漆垣外遺跡周辺の遺跡分布

2. 調査内容について

漆垣外遺跡の確認調査は6月27日に行われた。対象となる敷地面積約274m²のうち、地形等の様子から2×2mの試掘グリッドを2ヶ所設定し、事務局の担当者3名にて調査を行った。(第10図)

第1グリッドは対象範囲内の東の山側に設定をし、手掘りにより掘り下げを行った。2層の暗褐色土から黒耀石製の石器の未製品と思われるものと剥片が2点検出されたが、土層そのものはローム粒が多量に混じるふかふかの土で安定堆積とは考えられず、下層の褐色土についても5層のローム層につながる漸移層的な意味合いよりも、5層上面を削った後に2層を混ぜこんでいるような土層で、これらのことから考えると本グリッドについては、耕作等によるカクランや削平、整地を受けていることが推定され、遺構等の検出は無く、現状の土層堆積から遺構の残存する可能性も低いものと考えられる。

第2グリッドは対象範囲の中央部のやや下方に設定し、第1グリッドと同じく、手掘りにより調査を行った。土層の堆積は第1グリッドと2層までは同じであるが、3層として黒色土の層があり、5層のローム土に続いている。3層と5層の間に褐色土(第1グリッドの4層に相当する)がところどころ混入することから、第1グリッドの4層の上に堆積した黒色土とも考えられる。しかしながら、この黒色土についても、ローム混じりで全体にしまりが強い状況でプライマリーな堆積とは考えにくく、埋め土あるいは二次堆積の土層とみることができる。遺物は1層の表土層から3層黒色土にかけて出土しており、縄文時代早期末から前期初頭の所産と考えられるが、遺構等に関係するものではなく、土砂崩落あるいは整地の際の擾乱による流れ込みと判断されよう。以上の結果から今回の調査地において遺跡が展開する可能性は低く、今後の土地利用について、埋蔵文化財保護の必要はないものと判断された。

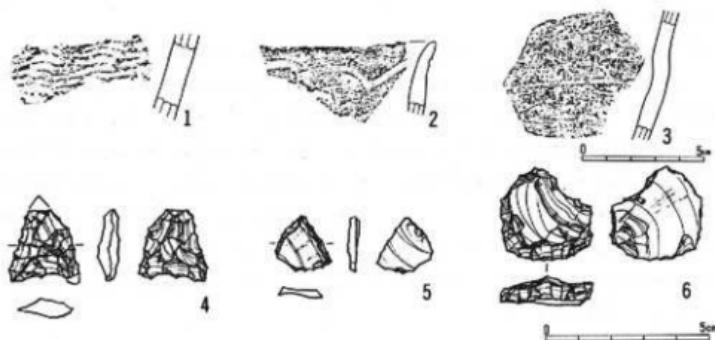
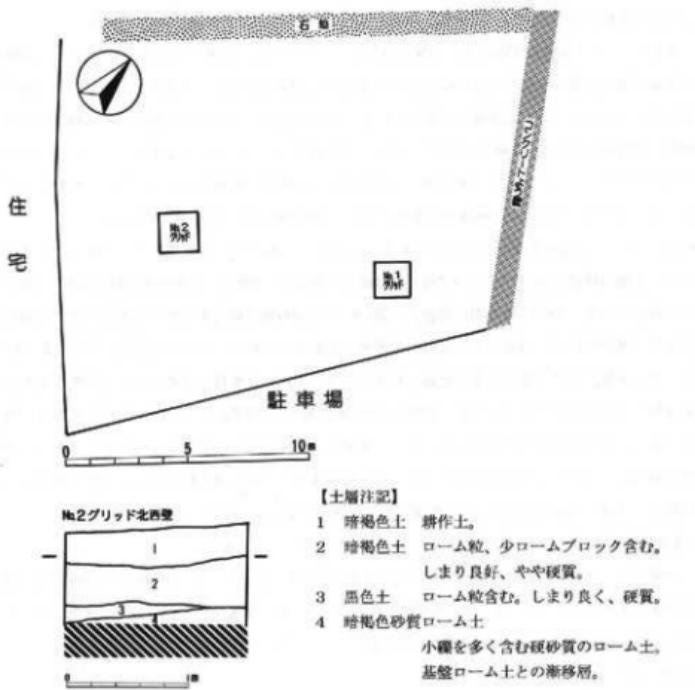
(遺構について)

遺構については第1グリッド、第2グリッドとともに検出がなかった。この理由として5層ローム層に人頭大の礫が多量に入りこんでおり、2次堆積と考えられるため、遺構はこの面において構築されなかつたもの、あるいは流れ込みによって遺構面が失われてしまったものと推定される。

(遺物について)

本遺跡では、2ヶ所の試掘グリッドより計38点の遺物が出土した。内訳は縄文土器9、時期不明土器4、石器未製品2、スクレーパー1、ビエスーエスキュー4、石核3、剥片類15である。なお石器類はすべて黒耀石製である。

第11図に出土した遺物を示した。1~3は縄文土器であり、早期末~前期初頭に属するものであり、図示しなかったものも含めて、本遺跡で主体となるものである。1は表裏に条痕が施され、胎土には多量の纖維含有が認められる。条痕は断面形態の観察から、絡条体を原体としたいわゆる絡条体条痕と判断され、表面には条痕と同時に付着された絡条体圧痕が認められる。2は口縁部破片で、纖維を含まず焼成は堅敏である。表面の口唇直下には断面凹形を呈する、沈線文が連弧状に1条施され、表裏面には成形時に残された指頭圧痕がみられる。いわゆる「オセンベ土器」の系列に属するものであろう。3は薄手の胴部破片で、表面には擦痕が認められるのみである。また内面には指頭圧痕がみられ、破片断面に認められる微妙な屈曲は、粘土紐を輪積みした際に生じたものである。2同様胎土には纖維の含有は認められないが、雲母が多く混入されている。



4~6は主なトゥールを図示した。4・5は石器であるが、欠損部分はあるものの、周縁の調整の程度は、中途な状態がうかがえ、未製品である可能性が高い。6は剥片を素材としたスクレーパーである。部分的な欠損はあるものの、調整は全面に及ぶ可能性が高く、刃部角も鈍いことから、いわゆる「円形搔器」として扱えよう。石器群の帰属時期については、本遺跡の出土土器で主体となる縄文早期末~前期初頭頃に相当させるのが妥当であろう。

以上が出土遺物の概要である。総じて土器片については周囲を磨耗している状況も認められ、これらの遺物が移動してきていることを示す資料であると考えられよう。

3. 調査のまとめ

漆垣外遺跡の初めての発掘調査は、前述してきたように遺構等の検出が無く、該地における遺跡の残存状況等については、依然不明のままである。しかしながら、縄文時代早期から前期に属すると考えられる土器片を検出したことは、本遺跡の内容を推定するに貴重な資料ということができよう。今回の調査地は遺跡の本体ではなく、遺跡範囲の下方の限界ということが言え、検出した遺物についても上方の遺跡本体からの流れ込みである可能性が高いと思われる。以上の結果から、本遺跡の主体は今回の調査地よりも上方にあり、台御堂遺跡なども含めた形での集落の存在が予想されよう。

本遺跡は立地的に霧ヶ峰や和田峠などの黒耀石原産地遺跡から諏訪湖あるいは平坦部に向かう尾根の裾野に位置しており、旧石器時代において諏訪湖東岸遺跡群を構成する茶臼山遺跡や北頭場遺跡、上ノ平遺跡、手長丘遺跡などの著名な遺跡とほぼ位置を同じくする。これらの遺跡が角間川流域を主体に分布するのに対し、本遺跡の立地する千本木川流域には旧石器時代の遺跡は確認されていない。しかし、千本木川が流れ込む諏訪湖沖には縄文時代草創期において曾根遺跡が展開することで、本遺跡周辺も縄文時代において黒耀石の運搬がなされていたものと堆定される。千本木川流域においては数々の遺跡が確認されているが、試掘調査を含めた発掘調査が行われたのは今回が初めてである。周辺は段階状地形に変化され、宅地化が進んでいるが、畠地で遺構等の残存が予想される地点も所々残っている。今後の調査によって、これらの遺跡の性格を解明していくとともに、旧石器時代の様相や曾根遺跡の成因などのデーターが得られるものと期待し、本地域における遺跡保護を図っていく必要があろう。今回の調査では、遺跡縁辺部におけるデーターが収集できたものと考えられ、今後の周辺地域の情報に注意をしていかなければならないものと考えられる。

参考引用文献

- 諏訪市教育委員会1983 「諏訪市の遺跡」
1995 「諏訪市史」上巻

IV 千鹿頭社遺跡（第6次）

1. 遺跡の概要

千鹿頭社遺跡は、諏訪盆地南西側に形成される守屋山系の山塊、通称西山の山地末端部、標高約780～820mの北東～東向きの緩やかな斜面上に立地している。千鹿頭社を中心としたこの一帯は、中沢川が山地から平坦部に流れ込む地点に発達した扇状地の北半分にあたり、周辺には湧水が豊富である。

本遺跡が位置するこの地区は古くから諏訪と伊那を結ぶ有賀峠の入り口として開けており、古代における政治・経済上の重要な位置を占めていたと考えられる地域で、周辺遺跡を含めてこの地区一帯が古代からの一大集落として、人々の生活の中心地であったと思われる。

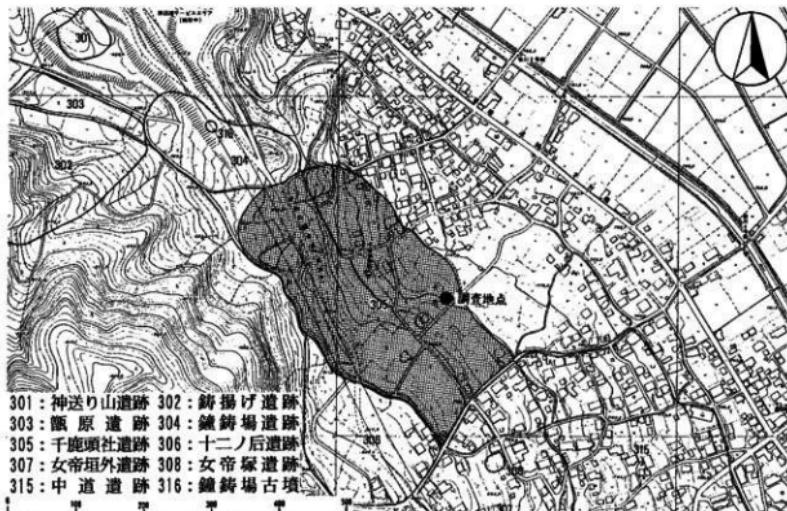
周辺遺跡として、北側には市有形文化財にも指定されている著名な灰釉水鳥鉢蓋付平瓶が出土した鍛錬場遺跡をはじめ鉄揚げ遺跡や櫛原遺跡などの縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡が連続して立地している。また南側には、縄文時代前期から平安時代にかけての集落跡である十二ノ后遺跡および女帝垣外遺跡・中道遺跡などが隣接しており、そのうち十二ノ后遺跡と女帝垣外遺跡については過去の中央道建設時の調査などから千鹿頭社遺跡と連続した一つの遺跡であると考えられており、本遺跡は縄文時代から古代にかけて、この地に広がる大集落遺跡になる可能性を秘めているといえよう。

なお、遺跡は諏訪湖を北側400mほどにのぞむが、現在水田地帯となっている遺跡直下東側の平坦部の沖積地は過去のある時期においては低湿地または湖中であったと思われ、本遺跡および近隣遺跡との関係が、魚網鍵などの出土品からも注意される。(第12図)

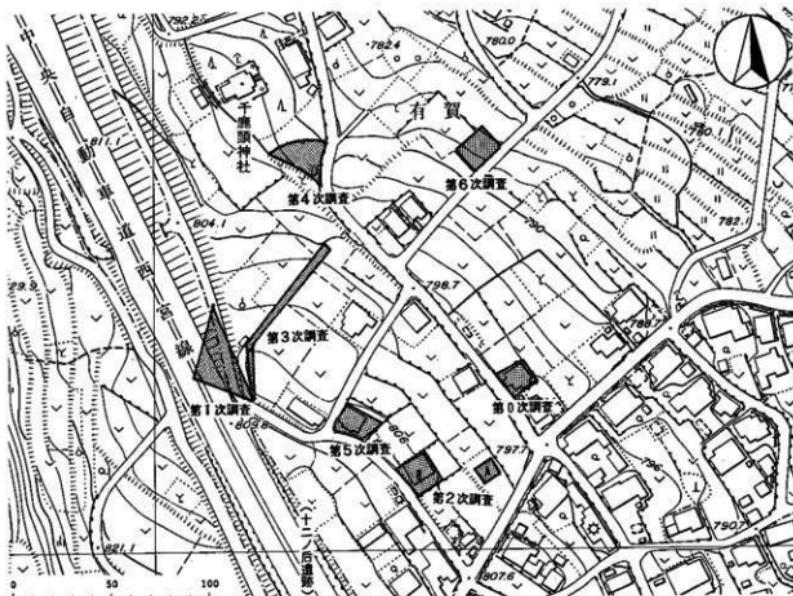
2. 過去の発掘調査

千鹿頭社遺跡では昭和43年に宅地造成に先立つ調査が宮垣外遺跡として行われているが、千鹿頭社遺跡としては昭和49年の中央自動車道建設時の調査が最初である。その後これまでに何度かの調査が行われている。これまでの調査の概要については「千鹿頭社Ⅲ」(諏訪市教育委員会 1990)および「千鹿頭社Ⅳ」(諏訪市教育委員会 1991)に詳しく述べられているので省略するが、これまでの調査により57基の住居跡と140基あまりの小竪穴、集石状遺構などが検出されており、本遺跡が縄文時代から平安時代まで連続とつながる集落遺跡であることが確認されている。過去の調査では縄文時代前期前葉から後期中葉の住居跡、あるいは古墳時代、平安時代の住居跡が検出され、遺物としては縄文前期中越式・神ノ木式・有尾式期の良好な資料や後期前葉以降の土器がまとまって出土しているのが目に付く。また第5次調査において出土した平安時代の据えカマドは県下でも出土例が乏しく、たいへん貴重な資料である。

また、同一遺跡とされている十二ノ后遺跡では、昭和49・50年に中央自動車道建設に先立ち調査が行われており、140基余りの住居跡と197基の小竪穴、方形柱穴列2基等が確認されている。



第12図 千鹿頭社遺跡周辺の遺跡分布



第13図 千鹿頭社遺跡調査区の位置

3. 調査内容について

今回住宅建設に先立ち確認調査が行われた箇所は、遺跡範囲のなかでも下限とみられている標高約790m付近である。過去の調査で住居跡が確認されているほぼ平坦な場所から諏訪湖に向かって緩やかに斜面が形成されているが、この付近からやや傾斜がきつくなり、千鹿頭神社のある谷部に落ち込んでいるが、その落ちぎわの箇所となる。調査は、遺構・遺物の有無の確認を目的としており、工事予定面積約mのなかで2×2mのグリッドを5ヶ所設定し、手掘りにより精査を行った。

調査区内における土層堆積は各グリッドほぼ同じで、1層が暗褐色土による畑の耕作土で、どのグリッドも均一的におよそ30cmの層厚となっている。2層も暗褐色土であるが、1層よりも暗味が増す。ローム粒が微量に混入し、しまりは良好であるが、粘性はやや乏しい。縄文時代から古代にかけての遺物が出土している。3層は黒褐色土で、基本となる黒色土に5cm大のロームブロックが多量に混入し、形成されている。他の混入物として焼土粒と考えられる赤褐色土粒が微量に存在する。粘性は強く、しまりも良好で、縄文時代の遺物が出土しているが、2層にみられた古代の遺物はほとんど姿を消す。これらのことから、3層は縄文時代の遺物包含層ということができよう。4層は明褐色を呈するソフトローム層で、縄文時代の遺構確認面及びこの地における地山層と考えられる。しかし、土層表面がかなり黒色土のしみが強いことなどから、安定した堆積ではなく、崩落土による2次堆積の可能性が強い。以上の土層堆積状況から判断すると遺物等にしても流れ込みの可能性が強いものと考えられる。

各試掘坑の様相は、ほとんど同じで、どのグリッドからも2層および3層から遺物が大量に出土しているが、遺構は検出できなかった。唯一、第4グリッドに於いてローム面に溝状の黒色土の落ち込みが確認され、遺構かとも思われたが、精査の結果溝底部に小砂利等を伴う幅が細く遺構的な要素が少なかつたため、自然流路と判断しているが、詳細は不明である。各試掘坑の土層堆積も地表面の傾斜にあわせて傾斜しているが、調査区下方のグリッドでは3層がやや厚めになっており、過去においてこの谷がもう少し大きかったことが予想されるとともに、北側の谷に向かって落ち込んでいく様子が理解されよう。西山地区の遺跡に総じて言えることであるが、山から諏訪湖あるいは平坦部に向かっての何度かの土砂崩落を受けながらも、集落を形成し生活していたことがうかがえよう。

【出土遺物について】

本遺跡では調査した5ヶ所のグリッドから总数590点の遺物が出土した。遺物の主体となるのは縄文土器と土師器であり、その他は黒曜石製石器類（主に剥片類）である。特に第4グリッドからの出土が顕著であり、遺構は伴わなかったものの注意される。

出土点数内訳は、土器類については縄文土器88点、弥生土器2点、土師器181点、須恵器・陶器類35点、時期不明土器131点となる。縄文時代石器類については黒曜石を原料とするものがほとんどで、石鏃（未製品を含む）4点のほか、剥片類を主体として141点ある。

第15図1~5は本遺跡出土の主な縄文土器片であり、出土資料には縄文前期と中期に属するものが認められる。1~3は前期前葉に属するもので、2・3には繊維の含有が認められる。4は前期末葉、5は中期中葉に属するものである。第15図6は波状櫛描文のみられる弥生時代後期の土器片である。

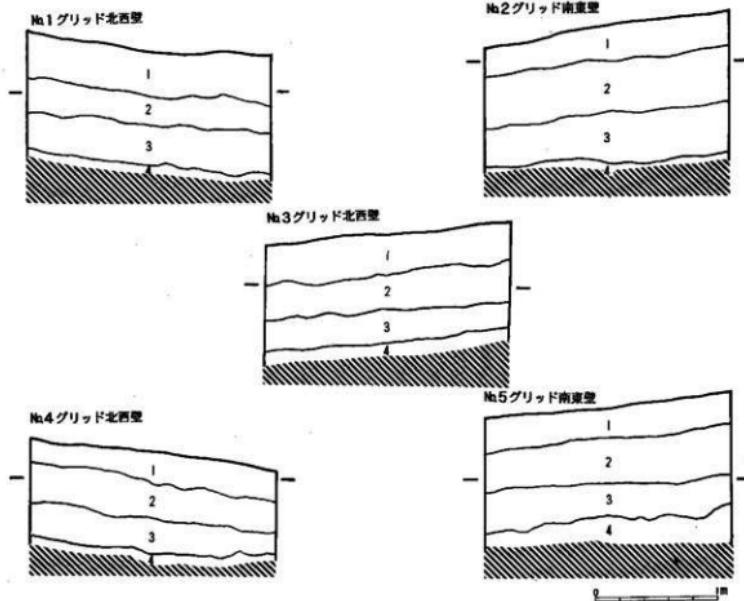


コンクリートよう壁

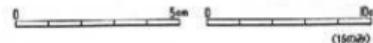
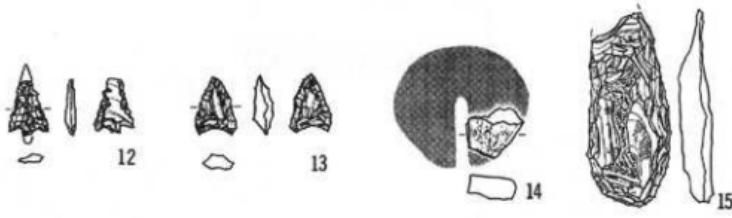
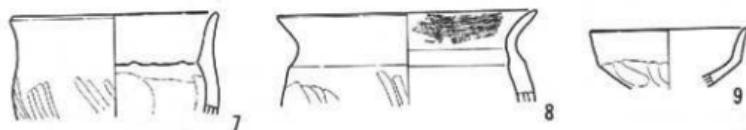
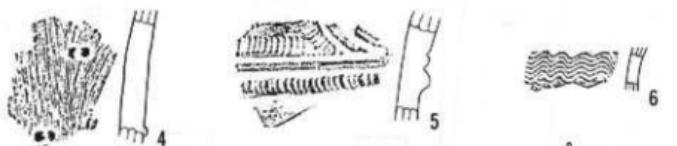
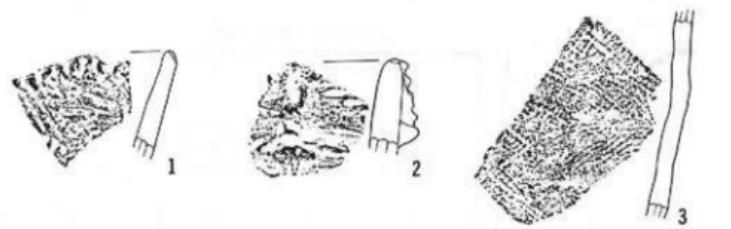
道
路

烟

0 5 10m



第 14 図 千鹿頭社遺跡試掘グリッドの位置と土層断面図



第 15 圖 千鹿頭社遺跡出土遺物實測圖

第15図7～11は土師器の類を一括した。古墳時代後半（7・9～11）から奈良時代以降（8）にかけてのものが多い。また、図示してはいないが、これらに年代的に相応する須恵器・陶器類も少量出土している。7・8は壺の胴上部であり、7は口縁部のあまり屈曲しないタイプである。9～11は口縁部付近のみの破片資料から復原したものであるが、高杯の杯身部分に相当するとみられる。10・11は内外面にミガキを施した後、赤色塗料を塗布している。

第15図12～15は縄文時代の石器類である。12・13は石鏃であり、12は中茎のみられるタイプで黒耀石製、13はチャート製である。14は滑石製の抉状耳飾片である。15は安山岩製の打製石斧である。

4. 調査のまとめ

千鹿頭社遺跡の第6次調査となった今回の調査では、多量の遺物は出土したもの、遺構等の検出は無く、今回の調査地に集落が展開されていたとは考えにくい状況である。該地は諏訪湖に向かっての北側に自然傾斜し、また千鹿頭神社が立地している北西の谷部に向かっても緩やかに傾斜している。過去に4次調査として行われた調査区と地形的な要素は類似しており、4次調査においても遺構は小堅穴や集石状遺構等のみの検出で、住居跡については発見されておらず、今回の調査の結果をあわせて考えると住居跡を中心とした集落の限界を感じさせる調査結果であるといえよう。

以上のことから推察するとこれまで言われてきたことではあるが、千鹿頭社遺跡における集落の本体は今回の調査区よりも上方の標高約800m付近の傾斜の緩やかな部分に展開するものと考えられる。また、これまでの調査でも、住居跡などの検出はこの付近に集中しており、同一の遺跡と考えられている十二ノ后遺跡や女帝垣外遺跡につながることを示すデータであろう。したがって、今回の調査における出土遺物のほとんどが遺跡全体から流れ込んできた2次堆積層内における所産と言わざるを得ないものと考えられる。

千鹿頭社遺跡をはじめとした十二ノ后・女帝垣外遺跡については、縄文時代の大集落及び古道の入り口に開闢した古代の集落が展開するものと考えられているが、これまでの調査ではその一端が垣間見えたに過ぎない。中央自動車道建設により、調査は進んだものの、その後はほとんど調査が行われておらず、遺跡の全容は不明のままである。また、千鹿頭社遺跡の範囲内でも、神社の北側については谷を挟んで集落が立地する南側と同じような地形となっており、過去においてどのような土地利用がなされているのか興味深いところであるが、これまでのところ調査例が無く不明である。宅地化が進んでしまった箇所もあるが、遺跡の大部分は畠地などとして土地利用されており、遺構等が残存している可能性は非常に強い。今後の開発などの動向を睨みながら、遺跡全体の調査及び保護を行う必要があろう。

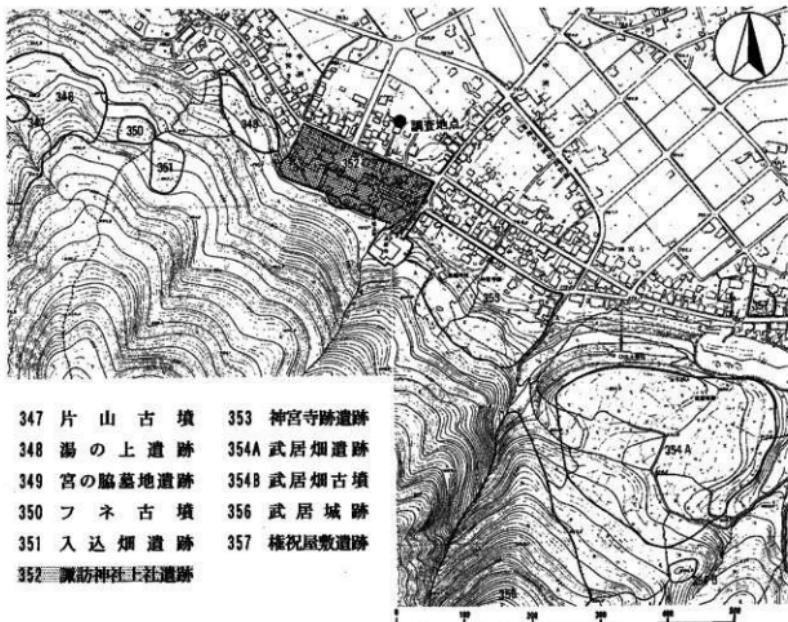
参考引用文献

- 長野県教育委員会他 1975 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市その3」
1976 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 諏訪市その4」
諏訪市教育委員会 1990 「千鹿頭社Ⅲ」
1991 「千鹿頭社Ⅳ」

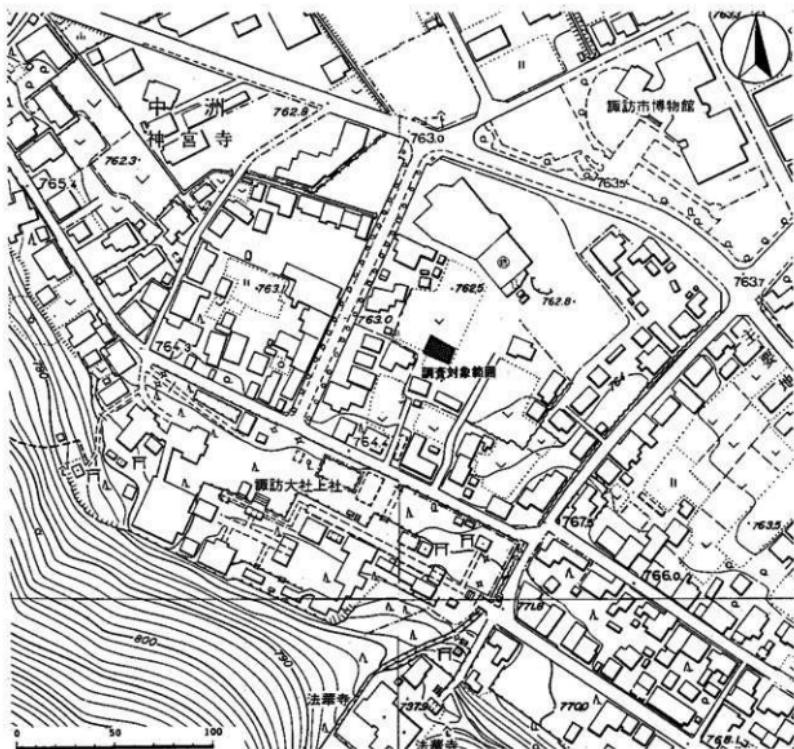
V す わじんじやかみしや
諏訪神社上社遺跡（隣接）

1. 調査の概要

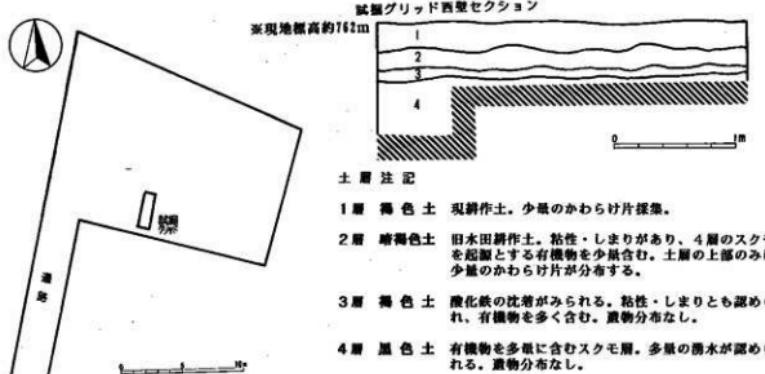
平成9年6月、市内大字中洲宮ノ脇裏196-4他地籍において、住宅建築に係わる農地転用の申請があった。照会の結果、当該地は諏訪神社上社敷地の隣接地であり、遺跡として登録されている範囲外にあたるため、とりあえずは発掘による記録保存の必要はないとの判断した（第16・17図）。しかし、諏訪神社上社の起源や展開について、これを裏付ける考古学的データは不足している状況であり、付近の様態についても、古文書・古図等に頼るしかないという現状がある。そこで地主の了解を得たうえで、遺跡範囲の確認を兼ねて、上社周辺の景観復原につながるデータを得る目的で、市教育委員会職員による試掘調査を、同年7月18日に実施した。調査は、住宅建築予定範囲内に1ヶ所設定した3×1mの試掘グリッドを掘り下げ、遺構・遺物の分布状況を確認する方法を行った（第18図）。調査の結果、表土付近を中心に、中世以降とみられるかわらけ片が数点見つかったのみで、遺構の存在は確認できなかった。脆弱な地盤を持つ本地点には、神社周辺施設の構築は難しかったものと思われるが、今回の調査だけでは判断はできない。今後も先述の目的に則った上社遺跡近隣の分布調査が必要とされる。



第16図 諏訪神社上社遺跡周辺の遺跡分布



第17図 舞鶴神社上社遺跡（隣接）調査区の位置



第18図 試掘グリッドの位置と土層断面図

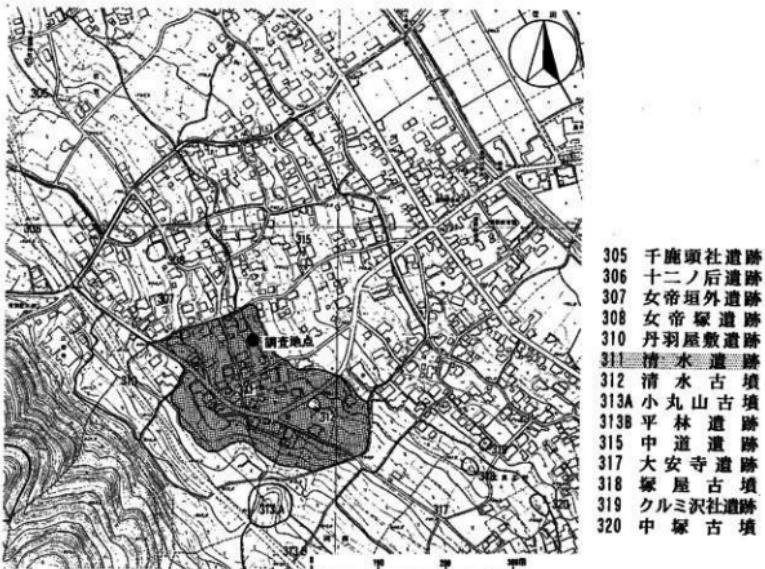
し みず
VI 清水遺跡（第7次）

1. 調査の概要

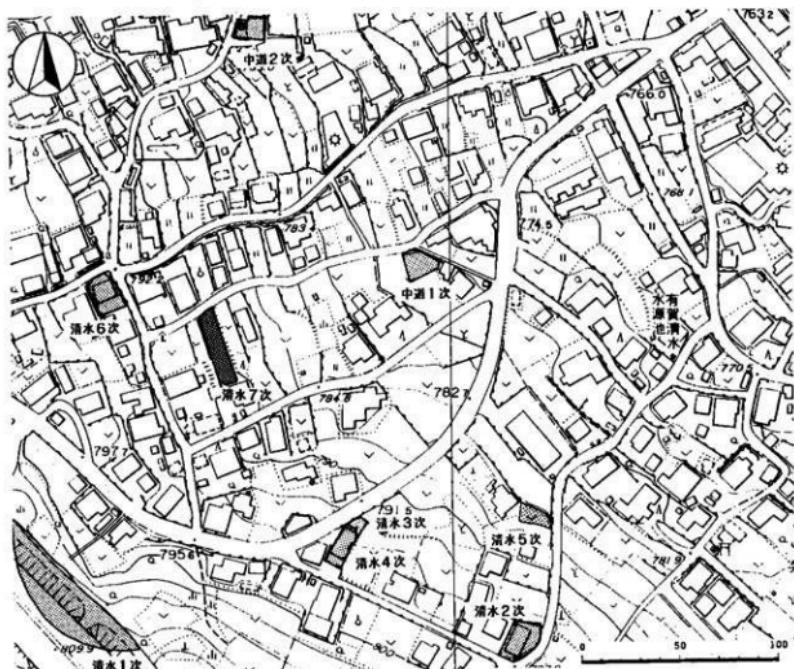
平成9年6月、周知の埋蔵文化財包蔵地である清水遺跡の範囲内（大字豊田字中道3449-1）において、農地転用に伴う開発の申請があった（第19図）。協議の結果、工事内容が、遺構面に及ばない砂利引き等の軽度の造成であることから、緊急発掘による記録保存の必要はないとの判断された。しかし、当該地においては遺物散布が顕著ではなく、今後の開発に備える意味でも遺跡データの収集は必要であると考えられた。そこで、地主の了解を得たうえで、第7次調査として市教育委員会職員による試掘調査を同年8月30日に実施した。

調査は当該範囲の南側に2×2mの試掘グリッドを1ヶ所設定し、掘り下げによって遺構・遺物の分布を確認する方法で行った（第20・21図）。調査の結果、表土直下の2層から古代～中世に属するとみられる土器片8点と、縄文時代以降とみられる黒耀石製剥片2点が出土したが、遺構は確認できなかった。3層以下は遺物の出土は全く認められず、土石流が原因とみられる密集した礫の堆積が確認できたのみであり、調査最深部では若干の湧水もあったため、ローム層までは及ばない状況で調査を終了した。

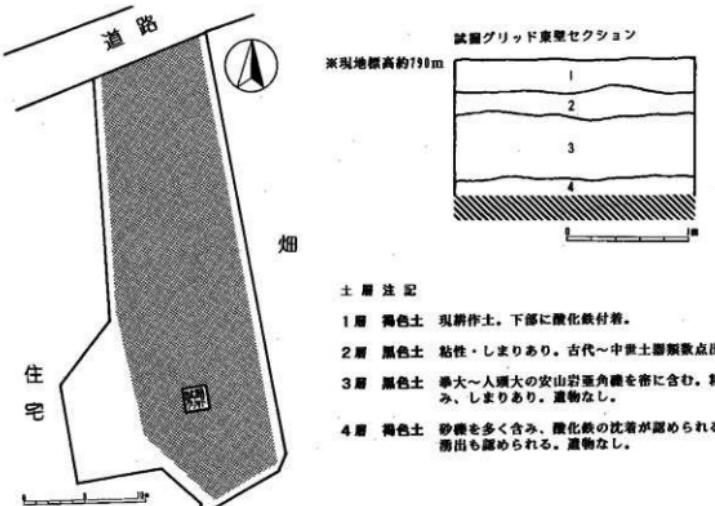
とりあえず当該範囲内における遺物分布については確認できたが、遺構の有無については、土石流の影響を受けている可能性も考えられることから、慎重に検討する必要がある。



第19図 清水遺跡周辺の遺跡分布



第20図 清水遺跡調査区の位置（中道遺跡含む）



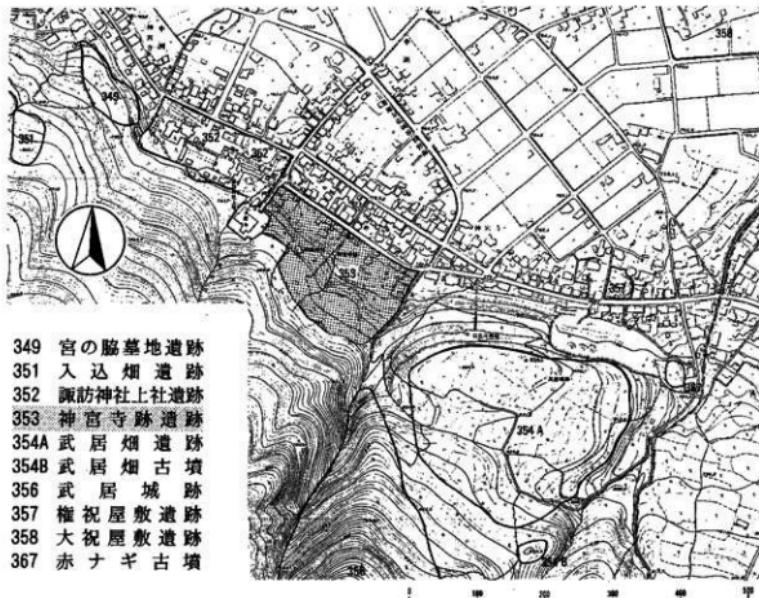
第21図 第7次調査試験グリッドの位置と上層断面図

じんぐうじあと
VII 神宮寺跡遺跡

1. 調査の概要

平成9年5月末、市内の不動産会社より博物館へ、墓地造成を予定している地籍について、埋蔵文化財に関する問い合わせがあった。この地籍は周知の埋蔵文化財包蔵地である神宮寺跡遺跡の範囲内であり、国史跡諏訪神社境内の指定予定地に隣接しているが、この周辺区域については過去に発掘調査が行なわれたことがなく、遺構の分布状況等が不明であるため、長野県教育委員会も交えて協議を行なった結果、試掘をともなう確認調査を行なって遺構の分布状況等を把握することとなった。調査区は明治の廢仏毀釈により破壊された、かつての諏訪神社上社神宮寺の境内の範囲内と考えられ、守屋山麓部末端にあたる東向きの急斜面とその下端の平坦部（道）からなる。現況は畠地及び休耕地である。調査は、例年になく雨天の日が多い中、平成9年8月から11月にかけて断続的に行なわれた。

トレンチ法による確認調査の結果、山麓末端斜面の谷筋から木製品集中と、いわゆるカワラケ溜まり等が検出されたほか、杭が見つかった。いずれも中世～近世に属すると考えられる。また、斜面末端の平坦部は近世～近代にかけて盛土が行われており、礫を用いた暗渠排水が検出された。かつての谷筋であることからか、礎石等の建築物に関する遺構は確認されなかったが、斜面部分から近世のものと思われる墓壙が1基、検出されている。



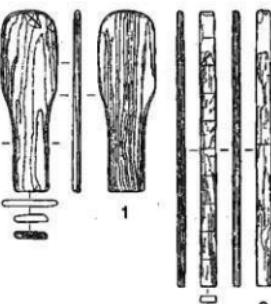
第22図 周辺遺跡分布図

出土した遺物のうち、カワラケ類は小片・細片が多く、器形全体を窺えるものがほとんどない。その破損状況から、最終的に何らかの理由で破碎された可能性もある。木製品類はカワラケ類よりも下層から出土するものが多かった。シャモジ（第24図1）やモノサシ（第24図2）などの木製品、板片や棒状の材破片のほか、多数のいわゆる箸状木製品がみつかっている。出土層位は場所により若干異なるが、基本的に水成自然堆積層と考えられる有機質を多く含む砂質層であり、あわせて落ち葉や針葉樹の球果なども検出されていること、現状で周囲から地下水の湧出（斜面上部からの伏流水？）が認められることなどから、これらの遺物は沢筋に何らかの理由で廃棄された、あるいは廃棄されたものが流れによって寄せ集められたものであると考えられる。

諏訪神社上社神宮寺の創建年代は明確でないが、正応5年（1292）には知久敦幸により普賢堂が、延慶元年（1308）にはやはり知久氏により五重塔が建てられるなど、鎌倉時代にはかなりの規模で存在していたことが窺える。今回の試掘調査では建物址を確認できなかったが、カワラケ溜まりについては祭祀遺構の可能性もあり、往時の神宮寺のあり方を考える上でも興味深い。



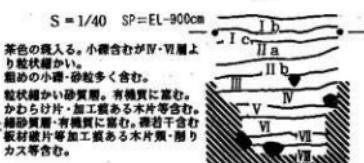
第23図 調査区の位置 (S = 1/500)



第24図 出土遺物 (S = 1/6)

第25図 調査区平坦部 土層堆積状況

S = 1/40 SP = EL-900cm



層位	色調	注記
I a	桃灰色土	埋土
I b	茶褐色土	旧耕作土
I c	暗茶褐色土	旧耕作土
II a	茶褐色土	炭粒・小礫含む。
II b	暗茶褐色土	炭粒・小礫含む。II aより暗。
III	黄茶褐色土	炭化灰の沈着層あり。灰色粒子含む。
IV	茶褐色土	茶色(炭化灰沈着)の部分が斑状に入れる。小礫・粗めの砂粒含む。

おんべだいら
VIII 御幣平A遺跡

1. 遺跡の位置と環境

御幣平A遺跡は、諏訪盆地の北方、霧ヶ峰の山塊西縁部に源を發し、湖盆に流れ込む角間川の下流付近に位置している。諏訪湖東岸地区の山麓部には、一般に断層活動の結果による地形と考えられる階段状の台地が何段か形成されているが、本遺跡は盆地への出口付近の扇状地で角間川に流入する支流の福沢川の左岸にあり、階段状テラスの2～3段目に立地する。背後の山地や福沢川によって形成された深い谷は現在でも恵まれた自然環境を保ち、古代の人々にとっても活発な生産活動の場を提供していたと思われる。また、周辺の福沢川両岸には縄文時代中期の集落遺跡である大ダッショ遺跡や弥生時代の住居跡と古墳壇丘が調査された一時坂遺跡が立地している。

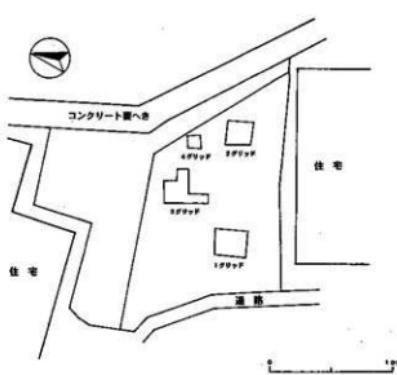
本遺跡では過去に諏訪清陵高校の改築工事に先立ち清陵高校グラウンドなどが試掘調査されており、時期不明であるが集石造構や木路状造構、縄文時代から古代にかけての遺物などが検出されている。過去の表探品や出土遺物などから古墳時代から中世にかけての祭祀的な遺跡との認識がされていた。

2 調査内容について

今回の調査は本遺跡範囲の西端に隣接する地区において個人住宅の建設が予定されたことから、遺跡範囲確認のために試掘調査を実施することで所有者の同意を得て、実施したものである。該地については、御幣平A遺跡に隣接というばかりでなく、江戸時代から明治時代において鉄物業が営まれていた場所であり、江戸時代の高島藩政下における城下町の様子が窺い知ることができるきっかけになる可能性もあり、その調査結果が期待された。試掘調査は、5月22、23日の2日間で行われ、縄文時代から古墳時代にかけての若干の遺物と近世と想定される鉄型などが出土し、土坑のような落込みも検出されたことから、急速、御幣平A遺跡の範囲を広げ、住宅建設に係る部分を全面調査する方向で、事業者と協議をすることとなった。幸いにして、事業者の理解を得ることができ、5月28日から6月9日まで第2次調査として発掘調査を実施した。



第26図 御幣平A遺跡調査区位置図



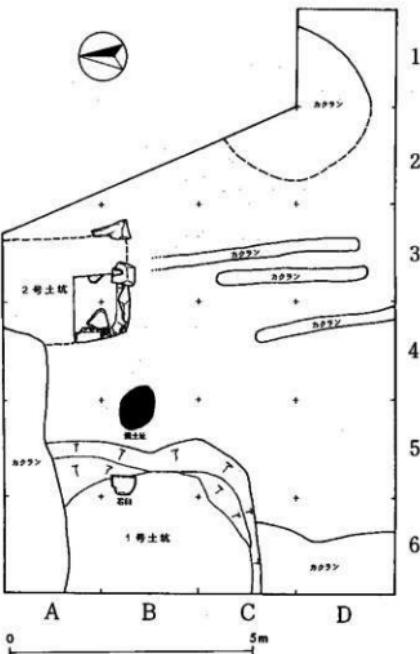
第27図 試掘グリッド図

調査の結果、縄文時代から古代にかけての遺物や遺構は全く検出されず、該地まで古代の集落範囲が及んでいる可能性はなくなったが、鋳物精製の過程で生まれる鉄滓（鉄くず）で埋められた土坑（1号土坑）や地下蔵と考えられる土坑（2号土坑）が確認された。遺物は近世陶磁器が若干出土したが、完形品は無く全て小破片であった。明治時代に鋳物業を廃業した後は畑などに利用されていた土地であり、後世のカクランが激しい箇所もあり、この他の遺物や遺構は全て失われていた。

1号土坑は大きな穴であるがカクランと調査区外へ展開しているため、全容が把握できなかった。調査可能であった部分だけで想定すると直径4mほどの円形ないしは梢円形をなすものと考えられる。土坑の深さは1m30cmほどであった。土坑覆土の表面及び周囲には焼土址がいくつか見られたが、これが土坑に伴うものなのか後世のカクランなのかは不明である。ただ土坑内部には埋められた鉄滓が隙間なくぎっしりと詰まっていたことから考えると周囲の土が鉄滓を埋めるのに伴って、部分的に被熱された可能性も否定できない。

2号土坑は調査区北側で確認された地下式蔵と想定される土坑であるが、こちらも調査区外へ展開しているため詳細は不明である。ただし土坑表面は硬質のローム土で覆われ、調査できた内部には人頭大のロームブロックが点在していたことなどから考えると人为的に埋められた可能性が高く、このことからも地下蔵であったことを推定させよう。時代的には伴出遺物がなく不明である。

以上が今回の調査で確認された遺構である。検出遺構からは鋳物工場が該地に展開していた可能性は少ないものと思われるが、土坑が大量の鉄滓で埋められることや中に石臼の壊れた破片、完形品ではなく壊れた（使用済みの）鋳型などが見つかっていることから、鋳物精製に伴って生じた鉄くずなどのゴミを集積した土坑であったことが判明した。このことから今回の調査区そのものには鋳物精製関連の遺構はなく、そのゴミ捨て場としての役割を持った場所であった可能性が高い。該地周辺は江戸時代、城下町でいわゆる職人が居た町として文献資料には紹介されているが、今回初めて関連遺構が発掘調査で確認された。今後は史料との比較を持って、実際の鋳物業に近く必要があり、発掘資料と文献資料双方からのアプローチが今回の発掘調査の成果を裏付けていくことになる。遺跡の性格を知る契機として、今後の研究に期待するものである。



第28図 調査区全体図 (1/100)

◆ 調訪市の発掘調査一覧（平成9年4月～10年3月）

遺跡名	金子城跡遺跡（2次）	所在地	中洲下金子
原因	住宅建設に先立つ確認調査	調査期間	H 9.5.16
検出遺構	なし		
検出遺物	陶磁器片・瓦片・すり鉢片（中・近世）等		
所見	土層堆積は宮川の氾濫をたびたび受けた状況を示していたが、明確な遺構はとらえられなかった。かなりの湧水が認められた。		
遺跡名	金子城跡遺跡（3次）	所在地	中洲下金子
原因	宅地造成に先立つ確認調査	調査期間	H 9.5.22
検出遺構	水路跡		
検出遺物	杭・棒材（近世）等		
所見	字名堀田といわれる地籍であり、金子城の堀の範囲内と考えられる。近世以降の水路跡が検出された。おそらく堀を埋め立てた時の名残であると考えられる。かなりの湧水が認められた。		
遺跡名	御幣平A遺跡（2次）	所在地	清水1
原因	住宅建設に先立つ確認調査	調査期間	H 9.5.28～H 9.6.9
検出遺構	土坑（近世・近代）5基		
検出遺物	鉄滓・鋸型片・陶磁器片・鍛滓・土器片等		
所見	「鍋屋小路」に隣接する、江戸中期～明治中頃まで営まれた鋳物屋の捨て場。当時の古文書も残っており、文献史料との関連も併せて近世の調訪の産業を知る上で貴重な資料。		
遺跡名	漆垣外遺跡	所在地	大和2
原因	住宅建設に先立つ確認調査	調査期間	H 9.6.27
検出遺構	なし		
検出遺物	縄文土器片・黒耀石製石器・黒耀石碎片等		
所見	千本木川左岸の扇状地に位置する遺跡の末端付近にあたると考えられる。		
遺跡名	千鹿頭社遺跡（6次）	所在地	豊田有賀
原因	住宅建設に先立つ確認調査	調査期間	H 9.7.3～H 9.7.4
検出遺構	なし		
検出遺物	縄文土器片・黒耀石製石器類・弥生土器片・須恵器片（縄文～古代）等		
所見	遺跡東端付近に位置する。遺物は流れ込みか？		
遺跡名	上社隣接	所在地	中洲神宮寺
原因	住宅建設に先立つ確認調査	調査期間	H 9.7.18
検出遺構	なし		
検出遺物	なし		
所見	上社境内から100m程北側の地点。耕作土下にスクモ層を確認。		

遺跡名	神宮寺跡遺跡	所在地	中洲神宮寺
原因	墓地造成に先立つ確認調査	調査期間	H 9.8.5～H 9.10.28
検出遺構	木製品集中、カワラケ溜まり(中世)・墓壙(近世)等		
検出遺物	木製品(物差・矢羽根等)/中世・カワラケ溜まり(中世)・陶磁器類(近世～近代)等		
所見	明治の廃仏毀釈時に破却されてしまった上社神宮寺の境内南半にあたる地点。谷筋の木製品発業場およびカワラケ溜まり(祭祀に伴い使用されたもの)等が発見された。また、長さ約2mの当時の杭も見つかっている。多量の中世木製品は貴重な資料。かなりの湧水が認められた。		
遺跡名	清水遺跡(7次)	所在地	豊田有賀
原因	資材置場造成に先立つ確認調査	調査期間	H 9.8.30
検出遺構	なし		
検出遺物	土器片(古代～近世)等		
所見	土石流による疊層の堆積を確認。		
遺跡名	ジャコッパラ遺跡群	所在地	四質霧ヶ峰
原因	長野県黒耀石原産地遺跡分布調査	調査期間	H 9.10.29～H 9.11.27
検出遺構	石器ブロック(旧石器時代)		
検出遺物	黒耀石製石器類(旧石器～縄文)・縄文土器片等		
所見	山間部の遺跡分布調査で新たに2ヶ所の遺跡(ジャコッパラNo.21・22遺跡)を発見。		
遺跡名	推定齋宣太夫屋敷	所在地	中洲神宮寺
原因	道路改良に先立つ確認調査	調査期間	H 9.12.3～H 10.1.23
検出遺構	なし		
検出遺物	土師質土器片・陶磁器片・桶等		
所見	上社五官祝の一つである齋宣太夫屋敷跡周辺と思われる地点。過去の造成により沖積地を埋め立てた状況が窺われた。敷地端部又は外部か?		

◆ 工事立会一覧(平成9年4月～10年3月)

遺跡名	所在地	原因	立会結果
・鍾錘場	豊田有賀	放送施設設置	遺構遺物共に認められず
・山口・台御堂	大和2	住宅建設	遺構遺物共に認められず
・ミサゴ	角間新田	河川改修	遺構遺物共に認められず
・カジバ畑	岡村2	市道改良	遺構認められず 土器片2点
・穴 場	双葉ヶ丘	県道拡幅	遺構認められず 黒耀石1点
・中 道	・ 豊田有賀	倉庫建築	遺構遺物共に認められず

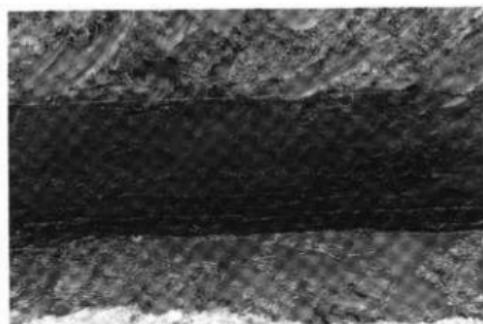
報告書抄録

ふりがな	しないいせきしきつちようさほうくしょ						
書名	市内遺跡試掘調査報告書						
調書名	長野県諏訪市平成9年度試掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	諏訪市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第47集						
編著者名	青木正洋・田中聰・五味裕史						
編集機関	諏訪市教育委員会						
所在地	〒382-8511 長野県諏訪市高島1-22-30 Tel.0266-(52)4141						
発行年月日	1998年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"	東經 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
かねこじょうあと 金子城跡遺跡 (2次)	すわし。なかす 諏訪市中洲 下金子	20206	359	36° 00' 32"	138° 07' 08"	1997. 5. 16	18 住宅建設に 先立つ確認 調査
かねこじょうあと 金子城跡遺跡 (3次)	すわし。なかす 諏訪市中洲 下金子	20206	359	36° 00' 36"	138° 01' 05"	1997. 5. 22	4 遺跡範囲確 認調査
うわしがいじ 渡堀外遺跡	すわし。おわ 諏訪市大和2	20206	6	36° 03' 14"	138° 07' 08"	1997. 6. 27	8 遺跡範囲確 認調査
ちかとうしゃ 千鹿原社遺跡 (6次)	すわし。なかす 諏訪市中洲 下金子	20206	305	36° 01' 09"	138° 05' 09"	1997. 7. 3 ~7. 4	20 遺跡確認調 査
かみしゃ 諏訪神社遺跡 (隣接)	すわし。なかす 諏訪市中洲 神宮寺	20206	352	35° 59' 46"	138° 07' 13"	1997. 7. 18	3 遺跡確認調 査
しきず 清水遺跡 (7次)	すわし。とよだ 諏訪市豊田 有賀	20206	311	36° 00' 57"	138° 05' 17"	1997. 8. 30	4 東側露き場 施設に先立 つ確認調査
じんぐうあと 神宮寺跡遺跡	すわし。なかす 諏訪市中洲 神宮寺	20206	353	35° 59' 34"	138° 07' 30"	1997. 8. 5 ~10. 28	100 遺跡確認調 査
おんべないら 御幣平A遺跡 (2次)	すわし。もよま 諏訪市元町	20206	40A	36° 02' 11"	138° 07' 39"	1997. 5. 22 ~5. 23 (本)1997. 5. 28 ~6. 9	100 住宅建設に 先立つ確認 調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
金子城跡 (2次)	城郭址	中世	-		陶磁器片・瓦片等		
金子城跡 (3次)	城郭址	中近世	水路状遺構		杭等		
渡堀外	集落跡	縄文	-		縄文土器片・黒曜石片等		
千鹿原社 (6次)	集落跡	縄文～古代	-		縄文土器片・弥生土器片 ・須恵器片等		
諏訪神社 上社隣接	社寺跡	中近世	-		-		
清水(7次)	集落跡	古代～近世	-		土器片(古代～中世)等		
神宮寺跡	寺院址	縄文・中世・近世	小堅穴・溝状遺構・杭 ・暗渠排水・基壇		木製品・かわらけ片・陶磁器片		
御幣平A	生産遺跡	近世	土坑・地下倉庫状遺構		鐵津・石臼・陶器片・縄型織片		

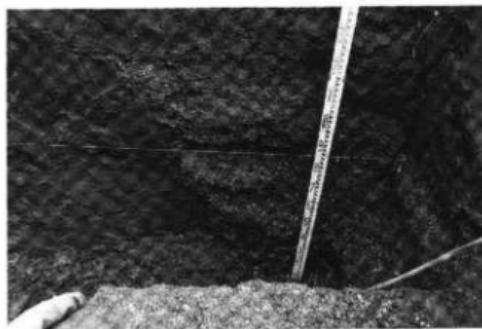
写 真 図 版



金子城跡第2次調査
試掘トレンチ調査風景



金子城跡第2次調査
試掘トレンチ土層堆積状況



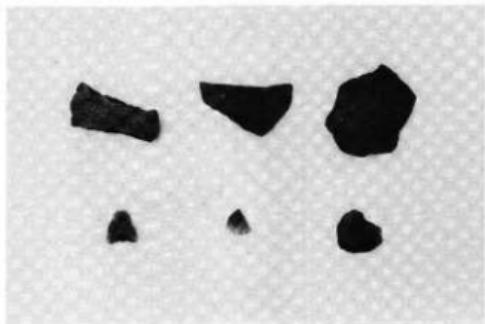
金子城跡第3次調査
試掘トレンチ土層堆積状況



塗垣外遺跡第1次調査
試掘調査風景



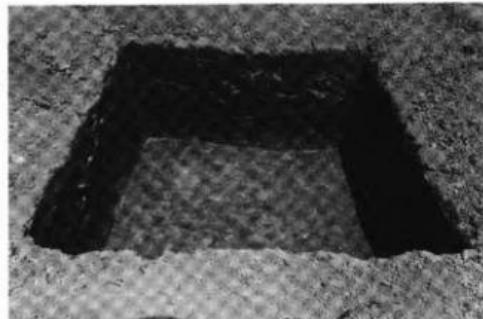
塗垣外遺跡第1次調査
No.2 グリッド土層堆積状況



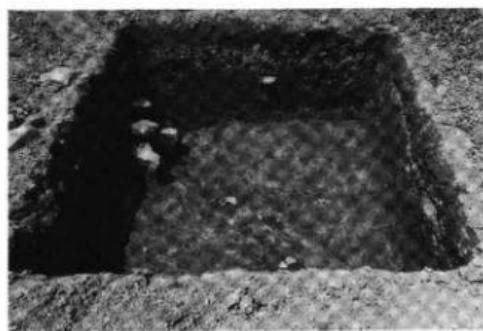
塗垣外遺跡第1次調査
出土遺物



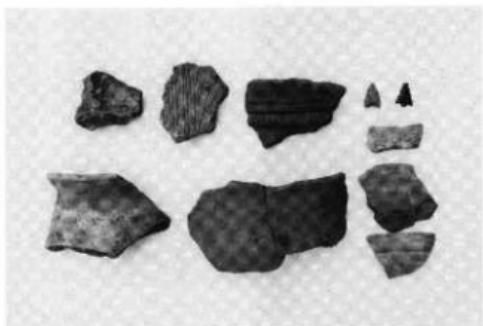
千鹿頭社遺跡第6次
試掘調査風景



千鹿頭社遺跡第6次
No.1 グリッド土層堆積状況



千鹿頭社遺跡第6次
No.5 グリッド土層堆積状況



千鹿頭社遺跡第6次
出土遺物



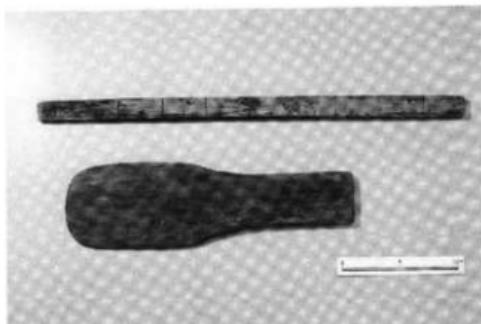
諏訪神社上社遺跡（隅接地）
試掘グリッド土層堆積状況



清水遺跡第7次調査
試掘グリッド土層堆積状況



神宮寺跡遺跡第1次
第1トレンチ調査風景



神宮寺跡遺跡第1次
出土木製品



御幣平A遺跡第2次
調査区全景

市内遺跡試掘調査報告書

—長野県諏訪市平成9年度市内遺跡試掘調査報告書—

平成10年3月24日

編集・発行 諏訪市高島1-22-30

諏訪市教育委員会

印 刷 (株)マルジョー上田印刷
